

古谷泥層の分布について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-07-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 隆夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025637

古谷泥層の分布について

橋本隆夫*

古谷泥層は相良町菅山付近を中心にした牧の原台地に、新第三系相良層群、掛川層群を不整合に被って分布し、下部に0.5-3mの基底れき層をともない厚さは5-20mで暗灰色の洪積世後期の内湾堆積物である。この古谷泥層の上には牧の原れき層が軽微な不整合で被っている。

昭和47-48年に金谷高校科学部員と調査を行なったが、最近、牧の原台地の各所で茶の木の改植が行なわれ、新しい露頭から多くの資料が得られたのでその概略を報告する。

1. 古谷泥層の分布

本層は牧の原台地の峠原から南東14kmの地頭方にいたる地域と、榛原町朝生原から南東に7kmの相良町太田にいたる地域に分布し、暗灰色でほとんど無層理のシルトで下部は0.5-3mの基底れき層になっていることが多い。基底れきは硬砂岩、チャートなど硬い亜円れき、亜角れきが多く、わずかに基盤の相良層群、掛川層群に由来する軟弱な亜角れきも含む。この中には木片やオニグルミの化石が含まれているが貝化石はない。これより上部が暗灰色シルトで所々カキが密集したり、ハイガイ、イボウミニナ、パイなどを多産し、リス・ウルム間氷期の内湾堆積物とされている。厚さは5-20mと変化するが分布の中心部で厚くなっている(図1)。

2. 堆積基準面の高度分布

古谷泥層と下位の新第三系との不整合面すなわち古谷泥層の基底面の高度は峠原で100m、地頭方で30m、朝生原で100m、太田で40mと北から南に低くなり、東西方向では西から東へ低くなっていて、海岸に近づくほど高度変化が大きくなっている。古谷泥層が分布するほとんど全域で基底面から上部へ2-3mの位置に多数の木片とオニグルミの種子の化石があり、それより上部数mの位置にカキが密集している関係が見られる。オニグルミを含む位置を古谷泥層堆積当初の基準面と考えると、その位置は現在は同一水平面上になく、かなりの起伏が見られる。

図2の堆積基準面の高度分布は堆積後の地殻変動、特に隆起運動の傾向を示すことになるので、南北方向でみると南から北に行くほど隆起が著しく、東西方向には東より西ほど隆起していることがわかる。全体としては現在の海岸線を形造る傾向の地殻運動が行なわれて来たといえる。

海岸付近で高度変化が大きくなり古谷泥層が海にもぐりこむような構造になっている。

朝生原付近で基準面高度が東西に急変し泥層の厚さが西方にうすくなり、この付近で古谷泥層がかなり浸食されている露頭が数か所で見られるので、この隆起運動は古谷泥層堆積中か、その直後から行なわれたものと考えられる。

3. 文献

土 隆一(1970): 牧の原台地の地形・地質とその生いたち. 静岡県地学会

金谷高校科学部(1974): 古谷泥層の研究. 静岡県小中高等学校理科研究発表論文集昭和49年度版

* 静岡高等学校

図1 古谷泥層の厚さ (m)

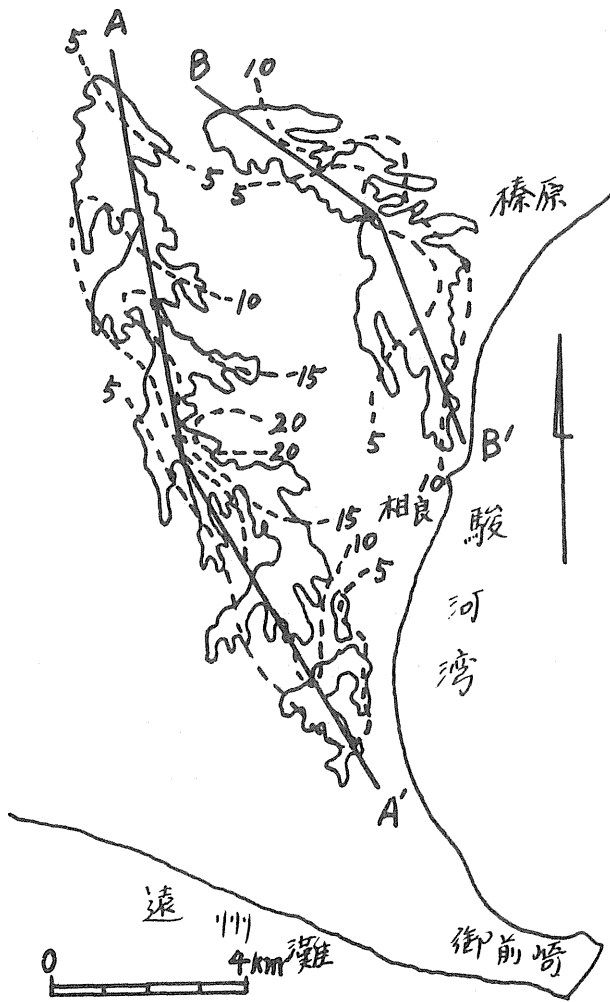


図2 堆積基準面の高度分布 (m)

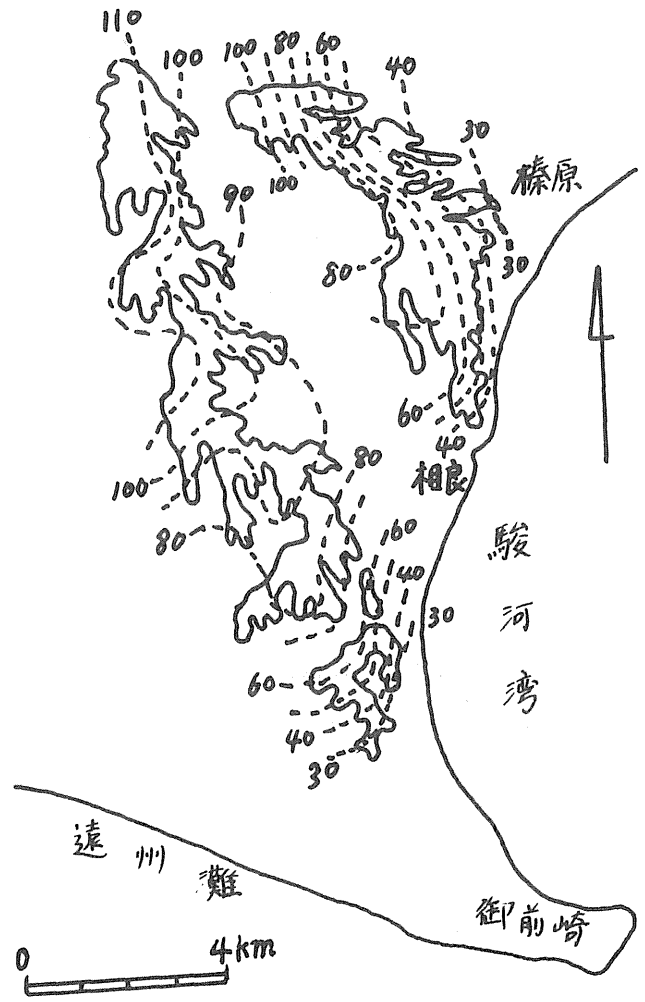


図3 地形と地質断面

